

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	アドブレーション・共立・NTT ファシリティーズ共同事業体	
施 設 名	山梨県立県民文化ホール	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業	
内定額(総額)	3,499	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	3,499	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<p>当事業体は芸術文化に対して「年齢・性別・国籍問わず、人々の心に他では得られない感動を与えるものである」、また、劇場に対して「アマチュア・プロ分け隔てなく、実演家と観客が一体となって感動や喜びを共有することのできる場であり、公演に向けた準備においても様々な人々のつながりを生むことにつながる」ものと位置付けている。以上を踏まえ、「当施設の運営を通じ、全ての人々が、文化芸術を通して、生きがいや活力を得、人々とのつながりを広げ、より充実した生活を送ることができる山梨の基幹施設としての役割を果たすこと」を社会的役割（ミッション）としている。</p> <p>さらに、山梨県は『山梨県文化芸術振興ビジョン』を掲げており、山梨の文化芸術振興を担う中核施設である当施設としては、このビジョンの実現についても上記同様、目標と捉えながら本事業を組み立てた。（下記参照）</p> <p>「1. 文化芸術を育てていこう（人づくり、担い手づくり）」 「2. 文化芸術を楽しもう（県民が一様に文化芸術に親しむ環境、県民の文化芸術拠点整備、充実）」 「3. 文化芸術を広げていこう（文化芸術を通して新たなコミュニティの創出や観光振興など地域活性化）」</p> <p>通年行われた4事業を通して、団員ら青少年の豊かな感性を育むとともに、調和の精神の育成にも多いに寄与出来た。</p> <p>今年度は日本とオーストリアの修好 150 周年ということもあり、特に「ウィーンからの贈り物(事業番号：2)」では、内定当初予定していた企画内容から修好年記念事業へと発展させ、山梨県とオーストリアのウィーン州との交流促進と地域の活性化につなげることを計画したため、内容・事業費ともに変更点が見られたが、結果として本事業が大使館認定の正式記念事業となる成果に繋げることが出来た。コンサート当日は、フーベルト・ハイッス駐日大使が来場しコンサートを鑑賞するとともに、長崎山梨県知事に行政関係者との友好交流を促進し、青少年の情操教育を推進するとともに修好記念をきっかけに地域の国際交流を一層推進する機会としての一端も担った。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<p>山梨県が平成 26 年に県民を対象に実施した調査によると、県民の 98%が文化に触れあうことを「必要」と考えているものの、実際文化活動に参加したことのある県民は僅か 18.5%にとどまっている。</p> <p>生涯に渡り文化を生活の一部として意識するのは幼少期から思春期にかけての文化体験に基づくとの研究結果があることから、このような現状下、舞台芸術の地域中核施設を預かる当事業体では、子どもたちが芸術・文化を楽しみながら経験する機会を提供することにより、将来の山梨の文化の担い手の育成に繋がると考え、これを大前提の目標として掲げ、本事業を展開した。</p> <p>今年度は定例の練習活動をはじめ、国際交流も兼ねた地域のイベントへのゲスト参加や、YCC 県民文化ホールで開催するプロアーティストの演奏会などを展開した。これらの活動を通じ、世界一流アーティストであるペーター・シュミードルやウェルナー・ヒンクをはじめとする本場のプロの演奏家らとの共演を果たしたことにより、飛躍的な演奏技術の向上を図れたことはもちろん、青少年の健全育成、豊かな感性を育むこと、調和の精神の育成などに対しても大いに貢献したことが成果として挙げられる。また、相乗的な効果として、子ども達のコンサートへの出演により、クラシック音楽の新たな子育て世代の鑑賞者を生み出すことに繋がった。さらに、演奏活動に触れた団員の友人がオーケストラに興味を抱き、「まるごと体験教室(事業番号：3)」に参加し楽器演奏を始めるなどの事例も実際に見られた。このようにオーケストラに参加する子ども達は演奏活動を通して親・兄弟や親戚、友人、地域の人々に音楽の楽しさを広める重要な役割を果たしているとともに、将来的に地域文化を牽引する人材となることも期待される。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

本事業遂行にあたり、下記の通り目標を設定した。

目標 1 : 団員数の増加

当事業助成金交付要望書提出の時点(2018年11月)では、団員数を35名と報告したが、その後年度末には4名が退団したことにより、今年度は4月より団員数31名といった減少傾向にある状況で活動を始動した。

団員数増加の目的のため、練習に参加する体験者に寄り添いながら相談に答えながら積極的に勧誘したり、指導者から主宰音楽教室に通う生徒を紹介してもらったり、団員の兄弟にアプローチしたりするなど行ってきた。その甲斐もあり、2020年3月時点では、6名(ヴァイオリン2名、チェロ1名、クラリネット2名、パーカッション1名)が新規に入団し、37名まで増員することが達成出来た。団員数の安定化は運営を行う上で最大の必要条件であり、来年度以降も新規入団を促進できるよう努めたい。

目標 2 : 定期演奏会の来場者数の増加

新型コロナウイルスの影響により、感染拡大を防ぐため、開催を中止としたため、実証不可。

目標 3 : 父母会の満足度調査

保護者の声をより運営に活かせるよう、今年度は前年以上に保護者会の開催の実施を試みた。保護者からは普通のオーケストラでの合奏のみならず、アンサンブル編成での発表を望む意見や、様々なジャンルの楽曲の演奏を希望する意見も多数見受けられ、実際に「第9回定期演奏会」では、これらの意見を反映し、開演前のウェルカムコンサートにて、アンサンブル編成での発表する場を設けることを企画した。結果として上記同様「第9回定期演奏会」の開催は延期となってしまったため、満足度の具体的実数まで調査することが出来ない形となってしまったが、運営側と保護者側双方における、より一層の連携強化を達成することが出来た。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

本事業の事業期間は、4事業を統合した通年プログラムを綿密に計画していたこともあり、特筆する問題も起こることなく、予定通り各事業を遂行することが出来た。

おおよそ3ヶ月に1回のスパンでイベントに参加することで、毎度次回イベントに向けて定期的に新たな課題曲に取り組むことが出来たおかげか演奏技術の向上を図れたと同時に、経験値の向上も参加イベントを重ねるごとに団員らの様子から伺えた。

事業費においては、今回やまなしジュニアオーケストラが活動以降初めて助成対象となったことにより、全体を通して過去にない大々的な事業を展開することが出来た。

変更点として「(1) 妥当性」内で「ウィーンからの贈り物(事業番号:2)」での大幅な企画内容の見直しについて述べたが、これにより具体的な金額として、ゲスト出演料が当初の予定から3000千円から5720千円へ増額した。しかしながら、事業を拡充させたことにより、外部団体(山梨県人会)からの協力なども得られ、結果として330万の協賛金を募ることが出来、自助努力で収入として計上することを達成した。

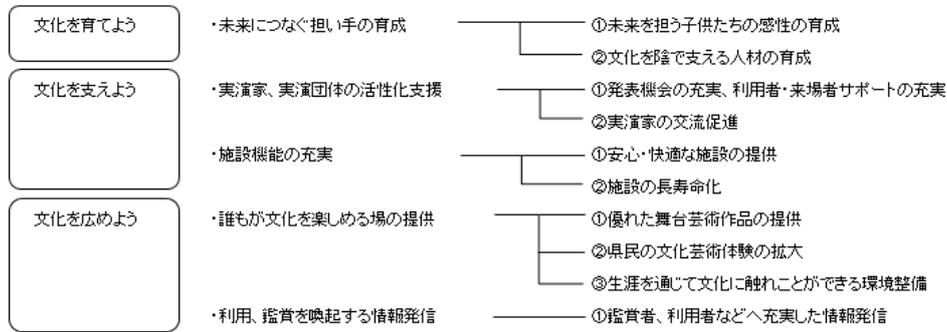
また、「まるごと体験デー(事業番号:3)」では、当初YCC県民文化ホール・会議室での開催を予定していたが、よりインパクトのあるイベントにするべく、会場を同施設大ホールに変更したり、楽器体験者の他、一般来場者の動員を図る手立てとして、トークゲストに音楽評論家・真嶋雄大氏と国内一流演奏家である野瀬徹氏(元読売日本交響楽団ホルン奏者)、磯絵里子氏(ヴァイオリニスト)を招聘したりといったように、支出項目等に変更も見られたが、全体予算を意識しながら減額可能な経費(楽器運搬費など)をあぶり出したことにより、全体として最終的に変更率を10%以内に収めることが出来た。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当事業体は、「文化を支え育むやまなし」を経営理念に下記図の通り施策の方向性として展開している。



やまなしジュニアオーケストラは我々が主宰し、図の「①未来を担う子供たちの感性の育成」、「②文化を陰で支える人材の育成」を基本方針に位置づけ運営している。

今年度の活動は、YCC県民文化ホールを拠点とする定例月2回以上の合奏練習を基本柱に、計4回(助成非対象事業1公演含む、「第9回定期演奏会(事業番号:4)」は新型コロナウイルスの影響により中止のためカウントなし)のイベントへの出演を果たした。(下記参照)

● 青少年交流音楽祭

台湾(2団体)、香港(1団体)、日本(当楽団)の各出演団体の単独ステージのみならず、合同のオーケストラのステージもあり、他では味わい難い当イベントならではの総勢約120名による演奏も体験出来、団として飛躍的な演奏経験を積むことが出来た。また、「オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットと管弦楽のための協奏交響曲(合同オーケストラステージ内)」では、団員(オーボエ)がソリストとして世界的巨匠、ペーター・シュミードル氏と共演するなど、非常に価値ある体験を共有することが出来た。

● ウィーンからの贈り物

日澳修好150周年を記念として、従来の「やまなしジュニアオーケストラの技術向上と音楽による地域の青少年の情操育む」という目的に加え、音楽を通して山梨県の国際交流を促進する展開としたが、計画遂行中に駐日オーストリア大使館の協力が得られ、フーベルト・ハイッス駐日大使の来場が実現した。大使には、コンサート後に開催した出演者らの交流会にも参加していただき、山梨県知事をはじめ県関係者と情報交換をするなど親交を深めた。また、子ども達も演奏や交流会を通して大使から激励を受けたり、ウェルナー・ヒンク氏をはじめとする世界一流アーティストから直接演奏指導を受けたりするなどの成果を上げることが出来た。

● まるごと体験デー

参加募集当時、「第9回定期演奏会」開催に向けて公演CMを地元放送局(山梨放送)にて放映したことも集客の効果として現れ、当初予定していた参加人数を大幅に上回る数の応募を頂けた。5歳から中学1年生、経験者から未経験者といった様々な参加者に、オーケストラを「聴く・学ぶ・演奏する」といった多角的且つ誰もが親しみやすい内容でオーケストラの楽しさを提供することが出来た。さらに未経験の参加者の中には、今回の事業を通じて、当団指導者の個人教室へ楽器を新たに習い始めるといった動きも見られた。また、新たな試みとして、大ホール舞台エプロンステージに従来の客席椅子を設置した「ステージ内劇場」を会場として採用し、劇場の新しい使い方や可能性を模索することにも取り組めた。

● 第9回定期演奏会

新型コロナウイルスの影響により、感染拡大を防ぐため、開催中止。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

やまなしジュニアオーケストラは、「文化を支え育むやまなし（（4）創造性 参照）」を基本方針とし、音楽教室などで個々に学ぶ児童や生徒に対し、「合奏の魅力発信」、「合奏を通した子ども達の協調性を育む場の提供」、「豊かな感性を育むこと」を目指すため、平成 24 年 4 月に設立、これまでにおよそ九年間の活動実績を積み上げてきた。また、当楽団は山梨県内唯一の子どものためのオーケストラ演奏団体であり、県内全地域や近隣県といった様々な地域から、小学 5 年生から高校 3 年生までの幅広い年齢層の団員が所属している。

当団は定期演奏会をはじめとする通年年間の演奏活動を通して、普段日常の学校生活などでは経験し難い一流演奏家との共演やレクチャー、同世代の海外ジュニアオーケストラとの共演によって外国語を学び実践する機会になったり、文化や習慣などの国際交流も行えたりと、音楽面での技術向上のみならず、青少年の情操豊かな心を育むことに対しても成果を挙げている。

一方、山梨県が平成 26 年に県民を対象に実施した調査によると、「子ども達が芸術・文化に親しむ機会」について大人たちの印象を調査した結果では、「十分である」と回答した県民は僅か 2.6%のみとなり、反して「あまりない」、「全くない」といった回答が過半数を超える結果となっている。当共同事業体は、やまなしジュニアオーケストラの活動を中心に、小学校 6 年生を対象に開催している「万作の会 小学生のための狂言教室」や母子が同じステージで作品作りに取り組む「山梨演劇サークル Life」などの取り組みを通して、子ども達が文化活動の活性化を促し、だれもが「自分の文化」を持ち、活力ある地域づくりを達成することを山梨における舞台芸術の地域中核施設の役割として取り組む。

【当共同事業体による担い手育成の代表事業】

- (1) やまなしジュニアオーケストラ
- (2) 小学生のための狂言教室
- (3) 山梨演劇サークル Life
- (4) 劇団四季 こころの劇場

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

今年度は、各事業を通じて国内外の一流アーティストとの共演も多く、「音楽による地域の青少年の情操育む」といった目的に対し、非常に大きな効果が図れた。団員の中にはかねてからアーティストとの対面を望んでいた者も多くおり、直接指導を受けたり、交流を行ったりしたことにより、団員からは「今後自身の音楽活動にとって大きな糧となった」といった意見も見受けられ、各々の演奏意欲の向上に繋がった。

演奏技術面では、ポルカなどの小品曲や、モーツァルトの協奏交響曲、後期ロマン派を代表する「フィンランディア」や「新世界」といった大曲など、多様な時代、ジャンルの作品に触れたことにより、テクニック向上が図れたことはもちろん、演奏を完遂するための集中力や技術習得に至るまでの数ヶ月に渡る忍耐力と継続力などといった面でも団員らの成長が伺えた。さらに「青少年交流音楽祭(事業番号1)」では団員がペーター・シュミードル氏と共にソリスト(オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットと管弦楽のための協奏交響曲にて)として演奏するなど、非常に価値のある経験を提供することが出来た。

また、認知度の向上と団員数の促進を画策するため、今年度はより広報活動に力を入れた。「第9回定期演奏会(事業番号4)」を、山梨日日新聞社・山梨放送との共催事業として初展開したことにより、公演CMが全県に渡りYBSテレビにて放映された。これにより、チケットの売り上げに繋がった他、定期演奏会直前に開催された「まるごと体験デー」への参加者を大幅に伸ばしたり、関係各所から反響の声を頂いたりするなどといった相乗的なアピール効果も見られた。加えて、新聞、ニュース番組などへ積極的なアプローチを働きかけた結果、「まるごと体験デー」が、各所で取り上げられるなど、今まで以上にメディアへの露出を奏功することが出来た。コロナウイルスの影響により、残念ながら「第9回定期演奏会」は開催中止に至る結果となってしまったが、来年度は10回目の開催を記念して卒団した大学生以上のOBの出演も加え、節目にふさわしい壮大なグランド・ステージと団のコンセプトポリシーを来場者に向けて発信していきたい。